

## 大留萌建設事業と町債(※61)問題

鉄道が通じ、留萌の港けんせつの建設も決まりました。

しかし、それだけでは留萌はってんの発展はありません。

留萌にふさわしい市街としての形ととのを整えていかなければならないと共に、港から出す荷物かくほを確保することができなければなりません。

明治43年(1910)、億太郎たちがお金を出して作った留萌電灯会社でんとうにより初めて電灯でんとうがとまり、電話も通じるようになりました。

※61 町債  
町の借金。

億太郎よくは翌年6月、東京の高橋たかはし是賢これかた（大蔵大臣高橋おおくらだいじんたかはし是

清きよの長男ちやうなん）や野村安太郎のむらやすたろうほか3名と共同きやうどうして、資本金しほんきん10

万円げんざい（現在の約2億円）で作った留萌興業合資会社こうぎやうごうしの

代表社員だいひやうしゃいんとなり、築港完成後の企業誘致きちやうゆうちや、港で取り扱  
う荷物の種類や量を増やそうとしました。

また、留萌駅周辺の土地ざっそうは雑草みかいちの生えた未開地（※62）で

したが、所有者しやうしやの毛利公もうりこうしやく爵たかはし（※63）家を高橋くどに口説かせ、

7万坪つぼ（約23ヘクタール）を40万円げんざい（現在の約8億円）

で買い取り、自分の土地あわと併せて私費しひで宅地造成たくちぞうせい（※64）、

区画を整理し、私設水道しせつすいどう（※65）も引きました。

#### ※62 未開地

まだ開発されていない土地。

#### ※63 公爵

「爵位しゃくゐ」と呼ばれる国への功労者よに与えられる名誉称号めいよしやうごうの中で、最もも上  
位の位を指す。

#### ※64 宅地造成

家を建てられるように土地せいびを整備すること。

#### ※65 私設水道

民間で作った水道施設しせつ。

これが、<sup>げんざい</sup>現在の開運町一帯の始まりです。

しかし、国の予算の問題と、留萌川の運ぶ<sup>どしゃ</sup>土砂や冬の<sup>はろう</sup>波浪による<sup>すな</sup>砂のため、工事がなかなか進みませんでした。

そのため、港の利用が進まず、<sup>おおわたんこう</sup>大和田炭鉱、<sup>おびらたんこう</sup>小平炭鉱、<sup>とうげしたんこう</sup>峠下炭鉱からの<sup>せきたん</sup>石炭の<sup>つ</sup>積み出し(※66)もできない<sup>じょうきょう</sup>状況で  
した。



<sup>ちっこう</sup>築港工事の<sup>ぼうはていよう</sup>防波堤用<sup>しんすい</sup>ケーソンの浸水

#### ※66 積み出し

港から船で他の地方へ運ぶこと。

その上、大正5年(1916)からは築港計画が縮小され、

外港(※67)の面積は半分となり、内港も水深が浅くなり港として機能できないものとなっていました。

このため、「留萌港は失敗だ。」「いない。」「工事は中止すべきだ。」などという声も聞こえるようになってきました。



築港工事の防波堤へのケーソンの据え付け

#### ※67 外港

留萌港は外港、内港、副港の三段式となっている。

しかし、大正7年(1918)、原敬が総理大臣の時に、地元

有志により築港工事の予算の大幅な増額と設計変更を  
してほしいとの陳情運動(※69)が起こりました。

原敬は内務大臣の時に留萌の港作りを決めましたが、

その留萌の築港工事がなかなか進まず、大変なことにな  
っていることを知り、内閣書記官長(現在の官房長官)

高橋光威の配下の野本治平を第六代留萌町長に送り込み  
ました。



野本治平

※69 陳情運動

こうしてほしいとお願いする運動。

野本町長は就任するとすぐに、大留萌建設事業を立案  
しました。

この計画は、留萌港完成後、荷物がスムーズに動くよう  
にするために留萌川を切り替えて、これによってできた埋  
め立て地で新市街の区画整理を行い、また、雑貨(※70)を  
扱うための副港を作り、排水溝築設(※71)工事を行うと  
いうものでした。

そして、これに必要な費用250万円を全て町債でまかな  
おうとしたのです。

しかし、一口に250万円といっても、現在の約50億円  
にあたり、当時、府や県でさえ、50万円の借金でも国に認  
めてもらうことはできませんでした。

※70 雑貨

日常生活品などの荷物。

※71 排水溝築設

水はけを良くするための排水溝を作ること。

ですから、人口 15,000 人ほどの小さな町にすぎない留  
萌町が250万円もの借金をすることなど、できるはずがな  
いと思われていました。

ところが、この<sup>ふかのう</sup>不可能が<sup>かのう</sup>可能になったのです。

野本町長は<sup>しゅうにんらい</sup>就任以来、ほとんど東京にいて、<sup>とうほんせいそう</sup>東奔西走(※  
72)し、その<sup>ねつゐ</sup>熱意は<sup>せいざいかい</sup>政財界を動かし、大正 10 年 (1921) 、  
<sup>ちょうさい</sup>町債250万円は<sup>ていこくせいめい</sup>帝国生命(※73)ほか 13 の<sup>ほけん</sup>保険会社から借  
り入れることに成功し、<sup>ないむしょう</sup>国(内務省)も<sup>けんせつ</sup>大留萌建設事業  
<sup>みと</sup>を認めたのです。

<sup>けんせつ</sup>大留萌建設事業は、大正 11 年(1922) 4 月に<sup>ちやっこう</sup>着工し、大  
正 13 年(1924)12 月に完成しました。

※72 東奔西走

仕事や用事のため、東へ西へとあちこちに<sup>いそが</sup>忙しくする様子。

※73 帝国生命

<sup>げんざい</sup>現在の<sup>あさひせいめいほけんがいしや</sup>朝日生命保険会社。

けんせつ ゆうびんきょく しんちく きゅうせい  
大留萌建設事業の主な事業は、郵便局の新築、旧制留

けんせつ きゅうすい しせつ けんせつ  
萌中学校の建設、港への給水のための水道施設の建設、

ざっか あつか ふっこう けんせつ  
雑貨を扱う副港の建設でした。



ゆうびんきょく  
留萌郵便局



たくさんしせつの施設が  
作られたんだMO～！



町立留萌中学校



留萌港ふっこう副港



水道の噴水試験

しかし、<sup>じゆんちやう</sup>順調に見えたこの事業も、後に大問題となりました。

<sup>きげん</sup>期限までにこの借金の<sup>へんさい</sup>返済ができなくなったのです。

というのは、<sup>せかいてきふきやう</sup>世界的不況(※74)による<sup>こっかざいせい</sup>国家財政の悪化と、

<sup>とつぜん</sup>突然起こった<sup>かんとうだいしんさい</sup>関東大震災(※75)の<sup>えいきやう</sup>影響で、<sup>ちっこう</sup>築港工事の工

<sup>ひ</sup>事費の<sup>はいぶん</sup>配分が<sup>おおはば</sup>大幅に<sup>へ</sup>減らされたことにより、<sup>おく</sup>工事が遅れ、

<sup>ぞうせい</sup>留萌川の埋め立てによって造成された土地が売れなかったからです。

このため、<sup>せけん</sup>留萌町は世間から信用をなくし、国会でもとりあげられ、大問題となったのです。

※74 不況

<sup>けいざい</sup>経済活動に活気がないこと。

※75 関東大震災

大正12年(1923) <sup>かんとういちえん</sup>関東一円で起きた<sup>じしん</sup>地震による<sup>だいさいがい</sup>大災害。

当時の荒木町長(※76)が、これを苦に自殺するという

事態になりました。

しかし、この借金は町民には負担のかからないように計画されていきました。借金を返す財源は、留萌川を埋め立てて作られた土地の売却代金(※77)と入港税(※78)だけに限定され、町民の税金から払うことはできなかったのです。

そのため、お金を貸した生命保険会社は、土地が売れるまでいつまでも待たなければなりませんでした。

億太郎は、留萌町会議員として留萌町の運営にあたり、心労は絶えなかったこととされます。

※76 荒木町長

第7代留萌町長荒木正澄。

※77 売却代金

土地を売ったお金。

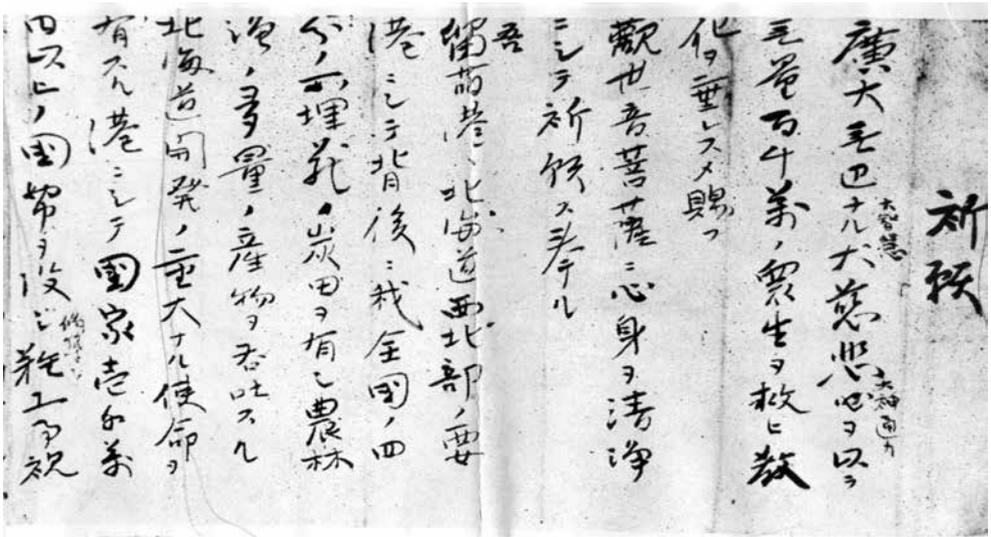
※78 入港税

船が港に入るときに納める税金。

そのため、<sup>しんじん</sup>信心(※79)深かった億太郎は昭和2年(1927)

11月25日、<sup>あさくさかのん</sup>浅草観音(※80)に<sup>ちょうぶん</sup>長文の<sup>きがんぶん</sup>祈願文を<sup>ささ</sup>捧げて、<sup>かんのん</sup>観音  
<sup>さま</sup>様に助けを求めています。

これが功を奏したのか、昭和8年(1924)に留萌港が  
完成し、土地が売れたため、翌9年(1925)には円満解決し  
ました。



<sup>あさくまかのん</sup>浅草観音への<sup>きがんぶん</sup>祈願文の<sup>したがき</sup>下書

※79 信心

<sup>かみさま</sup>神様、<sup>ぼとけさま</sup>仏様への<sup>しんこうしん</sup>信仰心が強いこと。

※80 浅草観音

東京都台東区浅草2丁目にある<sup>せんそうじ</sup>浅草寺。